

2020年度 研究部活動報告

◎小岩 大

荻野 聡 小林 拓哉

齋藤 貴博 杉坂 洋嗣

中野 未穂 八坂 弘

(◎: 研究部主任)

I 本年度の研究体制

1 本年度の取り組み

本年度は、竹早中学校独自の研究と竹早幼稚園・竹早小学校・竹早中学校の連携教育研究（以下、竹早地区連携教育研究）に取り組んだ。コロナウィルス感染拡大防止の観点から、研究活動全体が制限、縮小されたが、そうした中でも可能な範囲で研究を進めることができた。以下、その内容について示していく。

(1) 中学校独自の研究

1) CCSS プロジェクト研究

2017年度から、大学が自治体と附属学校と連携して進める「附属学校等と協働した教員養成系大学による『経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒』へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト」の一環として、経済的困難な家庭状況にある児童の主体的な進路選択を支援する「特別連絡進学制度」の開発と、進学後の「校内支援体制」の開発に取り組んでいる。この目的は、「多様性に関わった附属学校教育モデル」を開発し、他の附属学校や公立学校に普及還元することである。

今年度は、昨年度に引き続き、校内支援体制の開発、深化のために、特別連絡進学制度で入学した生徒や保護者から多面的にデータを収集した。また、昨年度から新たに導入したスクールソーシャルワーカー（以下、「SSW」）による支援について、個々のケースに対する支援を実践しながら、SSWを含めた校内支援体制について深めることができた。

こうしたSSWを含めた校内支援体制の深化を中心とした研究成果は、3月20日（土）にオンライン開催されたプロジェクトシンポジウムにて発表された。

2) 多様性の教育

一昨年度から中学校独自の研究として「多様性の教育」の研究に取り組んでいる。これは、CCSSプロジェクトをきっかけとして、多様化する未来を見据えた教育の充実という社会的な要請を踏まえ、竹早中学校の特徴である多様性を見直し、それを生かした教育の充実を図ろうという目的から立ち上がったものである。

研究3年目の今年度は、以下の2つのことに取り組んだ。1つは、本研究の基本枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」に基づく実践事例の検討である。この目的は、実践の蓄積とその検討を通して各枠組みの内容を深めることである。昨年度から全面実施となった道徳を中心に、授業づくりを通して、多様性を理解する、活かす子どもの姿、それを支える汎用的な力、さらにはそうした汎用的な力を育むための授業の手立てについて議論することができた。

2つ目は、「多様性の教育」に関わる先行研究の検討である。この目的は、多様性に関わる実践的な先行研究を整理することにより、研究の位置づけ、特徴を明確にするためである。

なお、昨年度開催した公開研修会は、コロナウィルス感染拡大防止の観点から、今年度は中止した。そのため、上述の取り組みの成果は、本書の「多様性の教育」の研究」の部のみの発表となった。ぜひご覧いただきたい。

3) 「中一中連携」の取り組み

東京学芸大学が定めた「年度計画」の「教育に関する目標を達成するための措置」では、「附属学校と地域との連携体制について検討する」ことが挙げられている。

それを踏まえ、本校では文京区の公立中学校との「中一中連携」の活動を模索してきた。その方策の1つとして、9年前から文京区教育研究会（以下、区教研）にオブザーバーとして参加してきた。今年度も、いくつかの教科で交流を行うことができた。

(2) 竹早地区連携研究

1) 研究体制

竹早地区連携研究では、2017年度から第7期研究「学びを深める場をつくる」を進めている。今年度は、第7期研究のまとめの年に位置づけ、これまでに構築してきた「学びを深める場をつくる視点」を基礎に「学びを深める場をつくる」授業実践をつくり、手立てに焦点を当てて検討した。

なお、2021年1月22日（金）に予定されていた竹早地区幼小中連携公開研究会を中止したため、今年度の研究成果は、研究紀要のみでの発表となった。

運営は、幼小中3校種の連携委員13名を中心として行い、中学校では、例年同様、研究部員全員が連携委員を兼務した。

研究体制は、連携委員が担う理論研究部会と全教員で取り組む実践研究部会を2部会体制である^{注1)}。連携研究会は、コロナウィルス感染拡大防止の観点から、一学期を中止し、2学期から始め、年間7回行った。指導案の検討等、連携研究会の機会だけでは足りない場合は、各教科領域で時間を決め、研究活動する場を設けるようにした。

2) 理論研究部会

理論研究部会は、学びを深める場分科会と発達分科会に分けられる。連携委員13名のうち、学びを深める場分科会に6名、発達分科会に7名が所属した。

学びを深める場分科会では、学びを深める場をつくる手立てに関する教科領域を超えた視点を抽出することに取り組んだ。そのために、各実践で提案された手立てを、引き出したい汎用的な力との関連で検討した。具体的には、各教科領域から提案された手立てについて、その「意図」に着目して整理しようという試みである。例えば「多面的、多角的に考える力」を引き出す手立て「既習事項をふり返らせる発問をする」について、その背景には「既習事項に着目させることにより、新たな視点から考えさせる」という教師がその手立てを講じる「意図」がある。こうした「意図」に着目することにより、教科領域の学習内容に依らない、教科領域を超えた手立てを考えるための視点を見出そうと考えたのである。「意図」に着目した検討の結果、いくつかの汎用的な力について、教科領域を超えた手立ての視点を見出すことができた。

発達研究分科会は、主体性の発達の切り口から学びを深める場をつくる手立てについて検討するために、主体性に関する研究成果「主体性の成長過程を示した「ステージステップ」」（以下、ステージステップ）に示された「教師の関わり」の項目を見直し、検討している。今年度は、昨年度カテゴリー化した「教師の関わり」について、カテゴリーごとに発達による傾向を調べた。その結果、どのカテゴリーにおいても、学年が上がるにつれて具体から抽象という大きな流れがみられることが確認された。また、前ステージでの手立てを受けて、次ステージの手立てを考えていたり、前ステージの手立てと類似の手立てを講じたりすることで、ステージ間の段差を小さくしようとする様子もみることができた。

3) 実践研究部会

実践研究部会は幼小中全教員が所属し、中学校の教員は自分の教科に所属するが、人間グループ（道徳・特活・総合）のみ、教務部、指導部から各1名と研究部から担任をもっている教員2名の計4名が担当した。

本年度の実践研究部会は、「学びを深める場を

つくる視点」「学びを深める場をつくる手立て」について、1月に公開研究会の代替えとして実施された地区内連携授業研究会での実践を中心に検討し、考えを深めることができた。

2 研究部分掌

本年度の研究部の分掌は、以下の通りである。

- 附属・研究推進委員会等渉外 (小岩)
- 公開・校内研究会推進 (荻野)(小岩)
 - ・多様性の教育(道徳)
 - (齋藤)(杉坂)(小岩)
 - ・書籍(荻野)(杉坂)(小岩)
- 研究紀要 (杉坂)(八坂)
- 研究資料 (中野)
- 予算 (小岩)
- 広報(HPなど) (八坂)(小林)
- 幼小中連携委員会 (小岩)(荻野)
 - (齋藤)(杉坂)
 - (中野)(八坂)
- 総合活動 (荻野)(八坂)

以上の分掌で滞りなく活動することができた。

II 研究部の活動経過と内容

1 本年度の研究活動経過

(1) 研究部会・校内研究会

研究部の活動【○】及び校内研究会【◎】の内容は、次の通りである。

- 3月 5日 第1回研究部会
 - 係分担, 年間計画
- 4月 6日 第2回研究部会
 - 今年度の活動について検討
- 5月 21日 第3回研究部会
 - コロナウィルス感染症拡大を受けての活動の内容の検討
- 6月 9日 第4回研究部会
 - 連携研究, 多様性の研究の検討
- 6月 17日 第5回研究部会
 - 多様性の研究(道徳指導案)の検討
- 7月 1日 第6回研究部会

多様性の研究(道徳指導案)の検討

- 7月 15日 第7回研究部会
 - 多様性の研究(道徳指導案)の検討
- 7月 31日 第8回研究部会
 - 多様性の研究(道徳指導案)の検討
- 8月 26日 第9回研究部会
 - 多様性の先行研究の検討
 - 道徳指導案の検討
- 9月 2日 第10回研究部会
 - 多様性の先行研究の検討
 - 道徳指導案の検討
- 9月 30日 第11回研究部会
 - 研究紀要募集について
 - 多様性の研究(道徳指導案)の検討
- 10月 14日 第12回研究部会
 - 多様性の研究(道徳指導案)の検討
- 11月 4日 第13回研究部会
 - 研究紀要の形式について
 - 多様性の研究(道徳指導案)の検討
- 11月 25日 第14回研究部会
 - 研究紀要の形式について
 - 多様性の研究(道徳指導案)の検討
- 12月 9日 第15回研究部会
 - 研究紀要の形式について
 - 多様性の研究(道徳指導案)の検討
- 12月 18日 第16回研究部会
 - 研究紀要の形式について
 - 道徳授業の振り返り
- 1月 13日 第17回研究部会
 - 次年度の連携研究の体制について
- 2月 10日 第18回研究部会
 - 校内研究会について
 - 次年度の連携研究の体制について
 - 多様性の研究(道徳指導案)の検討
- ◎ 2月 19日 校内研究会
 - 今年度の研究活動報告
 - ・多様性の教育の研究 ・CCSS
 - ・未来プロジェクト
- 3月 3日 第19回研究部会
 - 今年度の活動の反省

次年度の連携研究の体制について

(2) 「中一中連携」の実践

9年前より、文京区の区中研にオブザーバーとして参加している。今年度は、コロナウィルス感染拡大の影響により、例年よりも活動が十分にできなかったが、今後もさらに次のことを積極的に行っていきたい。

- ①授業研究会のオープン化と公開研への誘い
- ②区教研への会場提供と参加
- ③研究会等への講師派遣

2 幼小中連携研究活動経過

(1) 連携委員会

竹早地区連携研究では、幼小中の連携委員13名と各校種の管理職で構成する連携委員会と全教員参加の連携研究会を中心に活動してきた。連携委員会は、連携研究会の事前に行われ、連携研究会の運営内容が協議され、決められている。

連携委員会の活動は次の通りである。

- 6月11日 第1回連携委員会
年間計画提案と今年度の運営・方針
公開研実施の有無の検討
- 7月10日 第2回連携委員会
今年度の運営・方針の検討
理論研究部会について
- 8月24日 第3回連携委員会
理論研究部会について
- 10月15日 第4回連携委員会
次年度の公開研究会について
1月22日連携授業研究会について
- 11月10日 第5回連携委員会
1月22日連携授業研究会の内容検討
指導案の形式について
- 12月9日 第6回連携委員会
次年度の連携授業研究会の日程
- 1月12日 第7回連携委員会
1月22日連携授業研究会の運営確認
連携紀要の形式について
- 2月16日 第8回連携委員会
今年度の研究活動の反省
次年度の研究体制及び連携研究会の

日程について

コロナウィルス感染拡大の影響により、例年と比べて年間で2回少ない実施となった。

(2) 連携研究会・連携授業研究会

連携研究会を開催し、連携委員会の提案を全教員で議論し決定していくボトムアップによる運営が竹早地区連携研究の特徴である。

今年度は、コロナウィルス感染拡大の影響により1学期の活動を中止し、2学期から野活動となった。連携研究会【○】と授業研究会【◎】の内容は次の通りである。

- 8月15日 第1回連携研究会
組織発表、活動運営・研究の方向性
- 10月2日 第2回連携研究会
実践研究部会のみ（全体会なし）
- 11月12日 第3回連携研究会
次年度の公開研の日程について
理論研究の進捗状況の共有
- 12月11日 第4回連携研究会
次年度の授業研・事前研の日程
理論研究の進捗状況の共有
連携研究紀要について
- 1月18日 第5回連携研究会
全体会：紙上提案（参集なし）
1月22日授業研の運営確認
- ◎1月22日 第6回連携研究会
地区内連携授業研究会
- 2月22日 第7回連携研究会
全体会：紙上提案（参集なし）
今年度の研究活動の反省
次年度の連携研究会の日程

以上のように、1年を通して充実した活動を行うことができた。また、次年度の連携研究についても検討され、活発な意見交換がなされた。

3 授業研究会

(1) 校内研究会

今年度は、コロナウィルス感染拡大防止の観点から例年実施している授業研究会ではなく、中学校独自で行っている多様性の教育の研究、CCSS プロジェクト、さらに次年度から連携研究

として取り組む「未来の学校 みんなで創ろう。PROJECT」について今年度の進捗状況を共有する場とした。また、「未来の学校 みんなで創ろう。PROJECT」では、10年後の未来の学校モデルを創ることが目的だが、その第一歩となる取り組みとして、全教員で、10年後の未来の学校について、生徒像、教員像、学校像の観点から考えることができた。

(2) 連携授業研究会

今年度は、予定されていた6月19日の幼小中連携授業研究会、12月11日の事前研究会、1月22日幼小中連携公開研究会を中止した。一方で、今年度は、第7期研究のまとめの年に位置づくことから、それに必要な実践をする場として、1月22日幼小中連携授業研究会を行った。これは、非公開で行われ、大学の先生方による授業観察及び指導助言はオンライン配信で行われた。

実施された研究授業の一覧は表1である。これらの実践は、第7期研究「学びを深める場をつくる」の検証授業として位置付き、まとめに向けて貴重な実践となった。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 研究部の活動から

CCSS 研究の成果は2つある。1つは、本制度で入学した生徒が卒業を迎えたことである。4人の卒業生はみな第一志望校への進路を拓くことができ、プロジェクトの目的の一つである「主体的な進路選択」を実現することができた。2つ目は、SSWを含めた校内支援体制について、個別の支援を実践しながら、見えてきた課題の共有とそれに対する対策の検討を繰り返すことを通して深めることができた。

今年度は個別のケースに対する支援体制を構築できた。しかし、当然、複数のケースが同時に起こることも考えられる。次年度は、複数のケースが同時に起こったときに、円滑に対応できるような情報共有や支援方策を検討する場の設定等の体制づくりを検討することが課題である。

「多様性の教育」の研究の成果は、道徳の授業実践を中心に検討し、それを通して基本枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」に基づく授業の姿を深めることができた。特に、多様性を理解する、活かす生徒の具体的な姿や、そこで働く多様性に関わる汎用的な力、さらにはそれを引き出すための手立てを議論することができ、多様性に関わる授業について深めると同時に、その具体を共有できたことが大きな成果である。

次年度は、「多様性の教育」の研究のまとめの年に位置づける予定である。さらに実践的に研究を深めるとともに、研究のまとめと成果の発信に向けた書籍の発刊も考えている。これらのことを実現することが次年度の課題である。

2 連携研究の活動から

今年度の成果は、第7期研究について現段階の成果をまとめることができたことである。

学びを深める場分科会では、先述したように、「学びを深める場をつくる」手立てを、その「意図」に着目して整理し、いくつかの汎用的な力に関して教科領域を超えた手立てを考えるための視点を見出すことができた。また、発達研究では、手立てについて、学年の進行に伴って具体から抽象という流れがあることを捉えることができた。さらに、実践研究部会では、実践に関して制限がある中で、工夫して実践を行い、「学びを深める場をつくる」について深め、各教科領域で

表1 今年度の研究授業の一覧

日時	教科	授業者	講師	教科	授業者	講師
1月22日 他	国語	阿部 由美	中村 和弘 (東京学芸大学)	社会	上園 悦史	大澤 克美 (東京学芸大学)
	数学	佐々木陽平	中村 光一 (東京学芸大学)	美術	杉坂 洋嗣	
	理科	金子 真也	鈴木 一成 (東洋大学)	体育	齋藤 貴博	松田 恵示 (東京学芸大学)

成果をまとめることができた。

第7期研究は今年度で一つの区切りとなるが、これで子どもの学びを深める授業づくりを終えるわけではない。テーマが変わる第8期研究以降も、引き続き、「子どもの学びをいかにして深めるか」という問いの追究を前提に、授業実践について深めていきたい。

次年度からは、先述したように、「未来の学校みんなで創ろう。PROJECT」の一環を、竹早地区幼小中連携教育研究で進めることになる。この

プロジェクトは、大学と企業との連携プロジェクトであり、竹早地区の連携教育研究としては、これまでにない研究内容と体制となる。その分、課題が多くなるだろうが、竹早地区の研究の拡がりの可能性も非常に大きいと考えている。こうした好機を活かして、これまでの日本の教育界にない実践的研究に挑戦し、一般性の高い研究成果を全国に発信できるよう努力していくことを強く決意するところである。

(文責 小岩 大)

【参考資料】

注1) 2020年度の連携研究組織図を示す。「プロ」は「プログラミング」の意味である。

